

恩師の一言

ある大学の福祉ゼミで特別講義の機会を得た。

福祉は、いわゆる社会的弱者のことだけを考えることでなく、自らの福祉 = 幸せを考えることでもあることを、事例等に触れながら講義した。故に、人間を対象とする福祉を学ぶには、まず自ら思考、悩むことからしか、学んでいる知識・技術を対象者に応じていかに活かすかの知恵は身につかないことも話した。

ただ、「悩む」等の語彙からはネガティブな印象を受けるが、「悩みの後に進歩あり」というように、ポジティブな意味で理解するようにと触れた。

ふと気づくと、私は必ずと云っていい程、講義、講話等で「悩みの後に進歩あり」を話している。

思い起こせば、この言葉は、小学6年生の時の恩師から教えられた言葉である。恩師は、「悩みの後に進歩あり」だから、「何でも自由に書くように」と、生徒ひとり一人に交換ノートを用意してくれた。

何度この言葉に励まされて、その時々ノートを乗り越えられてきたことが……。今も私の座右の銘である。

教師の一言が、生徒の人生に良きにつけ悪きにつけ影響を与えると云われているが、正に、私には良き一言であり多大の影響を与えられ、今も感謝している。今も交換ノートの手に手紙等でおつき合いをいただいている。

人との「係わり合い」、「やりとり」こそが、福祉、教育の神髄と機会ある毎に話している私であるが、生徒ひとり一人の相談事に応じて、交換ノートに返事を書く恩師の日々の労苦は大変だっただろうと、今となれば容易に推測できるし、それだけに、恩師は真の教育実践家であったとつくづく思う。後年、恩師は我が故郷の教育委員長になられたが、この知らせを、私は当然の感で聞いたものである。

私も、恩師のように人の心に残る一言を云いたいが、未だその域に達していない悩み？があるが、「悩みの後に進歩あり」で、これからの内なる自分の進歩に期待しているのであるが、さて……。

(2003年05月19日記)